

東京医科歯科大学病院

Message

病院長／首席副病院長挨拶

東京医科歯科大学病院 病院長

藤井 靖久

Yasuhisa Fujii



診療・教育・研究を
通じて
社会貢献を続ける

2021年10月に東京医科歯科大学医学部附属病院と歯学部附属病院が一体化し東京医科歯科大学病院が誕生し、病院の理念は「世界最高水準のトータル・ヘルスケアを提供し、人々の幸福に貢献する」となりました。これは、医学と歯学の融合により相乗効果を発揮して、「頭から足先まで」トータルに全身を診ることで、今まで以上に患者さんの健康に貢献できる医療を提供するということを掲げたものです。

当院は一体化の前から社会貢献を使命とし、2020年に感染拡大した新型コロナウイルス感染症に対して、高度な診療機能を有する最後の砦として社会からの要請に応えるべく、東京医科歯科大学病院としては初代病院長の内田信一先生のリードのもと、病院一丸となって取り組みました。田中雄二郎学長が掲げた「力を合わせて患者さんと仲間たちをコロナから守る」をスローガンとして積極的にコロナ診療を行い、東京都内で最多数の重症患者の入院診療を行いました。同時にコロナに関する研究においても『PNAS』などの権威ある医学雑誌に掲載されるような質の高い成果を社会に発信しました。

また、当院は社会貢献の一環として災害医療も非常に重視してきました。災害の超急性期に緊急医療を提供するDMAT（災害派遣医療チーム）や、災害後長期間にわたって医療支援と健康管

理に従事するJMAT（日本医師会災害医療チーム）の隊員も多く在籍し、東日本大震災、西日本豪雨、熊本地震等に加え、海外の災害現場にも医療チームを派遣してきました。本年の能登半島地震でもDMAT、JMATチームに加え感染症対策チームなど、多くの医療チームが現地で活躍しました。

2023年10月には、C棟（機能強化棟）が本格稼働し、大地震発生時にも医療を継続できるよう強力な免震装置や停電にも対応可能な非常用発電機、太陽光発

電パネルも設置しています。最新の医療システムを備えた救命救急センターには、機能的な緊急対応を考慮した手術室・重症処置室など全10室や、ER専用病棟（ER-ICU-HCU）全30床を有しています。一般ICU-HCU病棟には25床の完全個室があり、患者さんに快適な空間を提供するとともに、院内での感染症の広がりを防ぎやすい構造となっています。ER病棟と合わせ8室が陰圧を保つことができる構造で空気感染する感染症を発症した患者さんにも安全に医療を提供できるようになっています。7室ある手術室では、ハイブリッド手術やロボット支援手術も可能です。加えて医療器材の洗浄・滅菌管理などを行う材料部では、停電時も滅菌処理ができる体制が整い、有事の際にも対応できるよう医療品を備蓄・管理しています。1階ホールも緊急時には救急医療の現場として機能できる設備が整っています。

そして、2024年10月、東京医科歯科大学と東京工業大学は統合して東京科学大学が誕生し、当院も東京科学大学病院となります。医学と歯学のみならず理工学と融合することで、当院はより高いレベルの医療を提供できると期待しています。東京科学大学病院としても、診療・教育・研究を通じて社会貢献を続けていきたいと存じます。

1988年東京医科歯科大学医学部医学科卒業。同大学医学部附属病院（現・東京医科歯科大学病院）泌尿器科勤務、米国ピッツバーグ大学およびレイビル大学内分泌代謝学教室博士研究員、がん研究会有明病院泌尿器科副部長を経て、2016年8月より東京医科歯科大学大学院腎泌尿器外科学教授。2019年4月より東京医科歯科大学医学部附属病院副院長（併任）、2023年4月より東京医科歯科大学病院院長（併任）。

東京医科歯科大学病院 首席副病院長

新田 浩

Hiroshi Nitta



世界最高水準の
トータル・ヘルスケアの
提供を目指して

東京医科歯科大学病院の歯系診療部門は、1日あたりの外来患者数が約1,450人（2024年3月）、2023年度の外来患者数が32万人を超え、年間入院患者数が13,000人（病床数60床）を超える、日本最大の歯科大学病院です。15の診療科とその下に12の専門外来を有し、あらゆる歯科疾患に対応する体制を整えています。

2010年10月に発行された本誌特集号『歯学部80年史』では、本学歯学部附属病院の歴史と概要について記述されていますが、ここではその後の変革について述べさせていただきます。

第1の変革は、2015年10月の先端歯科診療センターの設立です。このセンターは、高度で先進的な歯科治療を効率的に提供することを目的としています。日本の歯科治療では、社会保険制度が充実しているものの、保険制度の制約により、理想的な治療が難しい場合があります。さらに、歯学部附属病院は、独立した専門外来の集合体として機能していたため、包括的な治療が困難でした。本センターでは、歯科・口腔領域の専門スタッフを集結させ、連携を図りながら、最先端機器を用い、保険診療の枠組にとらわれない最適な最高水準の医療を提供しています。

第2の変革は、2021年10月に医学部附属病院と一体化し、東京医科歯科大学病院歯系診療部門となったことです。病院

1986年東京医科歯科大学歯学部歯学科卒業、1991年同大学大学院歯学研究科修了。同大学歯学部助手、1994～1996年文部省在外研究員（米国テキサス大学サンアントニオ校ヘルスサイエンスセンター）。2000年同大学大学院歯周病学分野助教。2003年同大学院歯科医療行動科学分野准教授。2019年同大学歯学部附属病院（現・東京医科歯科大学病院）歯科総合診療部教授。2022年同大学院総合診療歯科学分野教授、東京医科歯科大学病院首席副院長。

オーラルヘルスセンターが設立され、医系診療部門の手術・入院患者さんに口腔健康管理が実施されています。手術前に口腔内の清潔を保ち、口腔内細菌を減少させる周術期口腔機能管理は、術後の肺炎や重症感染症の合併症予防や入院日数短縮の効果があります。2023年度は1万人以上の患者さんに実施しています。

一体化後、歯系診療部門は特定機能病院となり、医療安全及び感染対策が特定機能病院の基準に沿った高いレベルで提供されるようになりました。これにより、クオリティーマネジメントが向上しました。口腔外科の大規模手術では、手術後の集中治療室（ICU）や高度治療室（HCU）での管理が可能になり、また医系の入院オリエンテーションや入院患者の栄養管理サポートシステムが歯系診療部門に導入され、入院治療がより安全に受けられる体制が整備されました。

第3の変革はこれからです。2024年10月に本学は東京工業大学と統合し、東京科学大学となります。医科と歯科の一体化により、世界最高水準の医療を提供することを目標としてきた東京医科歯科大学病院は、医学、歯学、工学が三位一体となった東京科学大学病院へと進化します。東京科学大学病院は世界最高水準を超える異次元の医療を提供し、人々の健康と幸せに貢献できると期待しています。

の理念は、「優れた医療人の育成に努め、患者一人ひとりに適した最高水準の歯科医療を提供する」から、「世界最高水準のトータル・ヘルスケアを提供し、人々の幸福に貢献する」へと変わりました。「トータル・ヘルスケア」には、医系と歯系の診療部門間の連携を強化し、「頭から歯を含めて足先まで」全身に対しての質の高い医療を意味します。これは、医学部と歯学部を兼ね備える東京医科歯科大学だからこそ提供できる医療です。医歯連携の一環として、2022年1月に

2021年10月に 「東京医科歯科大学病院」がスタート！

2021年10月1日に東京医科歯科大学医学部附属病院と歯学部附属病院が一体化して東京医科歯科大学病院となりました。

旧東京医科歯科大学医学部附属病院（東京都文京区、病院長：内田信一）と、旧東京医科歯科大学歯学部附属病院（東京都文京区、病院長：水口俊介）は、2021年10月1日より一体化し、「東京医科歯科大学病院」としてスタートしました。

東京医科歯科大学は、「知と癒しの匠を創造し、人々の幸福に貢献する」という理念に基づいて、開学以来、歯科・内科、二つの病院において、高度な医療の提供、医師および歯科医師等の育成、新たな医療技術の研究・開発を行ってまいりました。しかし、今後の高齢社会の進行による疾病構造の変化や、新型コロナウイルス感染症パンデミックのような新たな傷病の出現を見据えて、

口腔疾患と全身疾患の区別なく、トータル・ヘルスケアを実現することを大学の目標に定めました。

このような大学の目標を達成するために両病院が一つになり、医科・歯科を問わない診療科間の協力を可能にすることで、より高度で、安心安全な医療が提供できるものと考えています。「世界最高水準のトータル・ヘルスケアを提供し、人々の幸福に貢献する」という理念のもとに、患者さん中心の良質な全人的医療、高度先進医療の開発と実践、人間性豊かな医療人の育成などの基本方針に則り、人々の信頼に応える社会に開かれた病院であり続けるために一体化を実現しました。

東京医科歯科大学病院一体化記念式典が開催されました

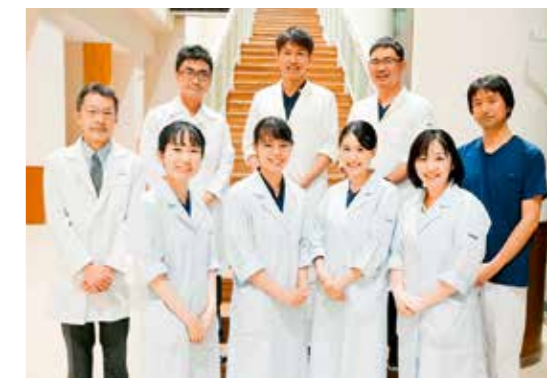
2021年10月12日にM&Dタワー2階鈴木章夫記念講堂にて東京医科歯科大学病院一体化記念式典が開催されました。この式典は、病院の一体化を記念するものとして、大学創立記念日に合わせて開催されました。

記念式典は田中雄二郎学長の挨拶にはじまり、大川淳医療担当理事（当時）の挨拶の後に、式典参加者らによる病院の新しい銘板の除幕式が行われました。最後に内田信一病院長（当時）が挨拶をし、式典は幕を閉じました。



オーラルヘルスセンターの設立

口は栄養の入口であり、ともすると感染の入口にもなり得ます。いつまでもおいしく食事を食べられる口の健康を維持することが体の健康の源となりますが、入院中は、全身疾患や入院生活の影響で口の機能や衛生環境が悪化しやすくなります。そこで、入院中の口腔問題の早期発見・早期介入に努め、口腔由来の合併症を予防することで在院日数の短縮を実現し、地域の歯科医療へつなげることを目的に、「オーラルヘルスセンター」を設立しました。このセンターでは、今まで個別に診療科間で行っていた入院患者の口腔管理に関する依頼窓口を一本化することで、医系診療部門と歯系診療部門の連携を強化し、患者さんにより質の高い医療を提供します。



入院患者の栄養管理サポート

東京医科歯科大学病院には、栄養サポートの認定資格を持った管理栄養士・医師・看護師・薬剤師と、外科・内科・リハビリテーション科医、言語聴覚士、臨床検査技師、歯科医師、歯科衛生士による栄養サポートチーム（NST）があります。入院患者の栄養管理をサポートするために発足したNSTは、多職種で毎週カンファレンス回診を行い、それぞれの職種の専門的な視点から患者さんに合わせた最適な栄養管理プランを検討し、提案しています。以前は医系診療部門の入院患者さんが対象でしたが、病院一体化により歯系診療部門の入院患者さんも対象となり、また、入院患者さんの栄養に関する相談窓口として歯系診療部門のリンクナースやリンクドクターが加わったため、栄養管理の相談がさらに円滑化しました。



歯系診療部門の入院オリエンテーション導入

これまで旧医学部附属病院でのみ行っていた入院オリエンテーションを、2022年3月より歯系診療部門にも導入しました。入院オリエンテーションでは、入院前に基礎情報を収集した上で、看護師・薬剤師・栄養士等多職種でスクリーニングを行い、各部門と連携することで、安全に入院治療が受けられるようサポートしています。また、入院前から地域と情報を共有するなど、より早期から療養環境調整に着手しています。退院支援については、2021年10月より一体化されており、入院前支援が加わりシームレスな体制が整いました。引き続き、病院全体で、より質の高い入退院支援が提供できるよう尽力していきます。



当時の理事・病院長からのメッセージ

病院一体化にご尽力いただいた
当時の医療担当理事、病院長、
首席副病院長より、
メッセージをいただきました。



前理事・副学長（医療担当）

大川 淳

Atsushi Okawa

東京医科歯科大学病院となって間もなく3年が経過します。C棟建設計画の確定後、2018年10月には医歯の2つの病院の一体化の検討も開始されました。当時の田中雄二郎理事からは、「結論ありきではなく、一体化について、メリットやデメリットを洗い出し、本学の歴史的経緯を考慮し、将来を見据えた議論をしていきたい」というコメントをいただきました。しかし当然ながら、機能、構造のみならず、職員、同窓生の心理などに多くのハードルがありました。田中雄二郎学長には歯科同窓会に繰り返し丁寧なご説明をいただき、また、統合診療機構長として両病院の経営を任されていた私は、いくつかの会議体を形成して多層的に議論を進めました。特に、両者に共通して存在するものの、独自の発展を遂げていた医療安全と中央材料部門については、それぞれに任命した機構長補佐を中心に、相当なすり合わせを要しました。全身麻酔手術や入院病床は医科棟に集約、薬剤部・検査部・材料部・放射線部などの基盤診療部門は完全合併など、機能的にも組織構造的にも根本的な再構築を進めました。議論を重ねるうちに、高齢者の健康維持や周術期の合併症低減に口腔機能が大きく影響することへの認識も進み、オーラルヘルスセンターの新設や歯科外来の再編も視野に入れ、最終的には極めてスムーズに統一化されたと考えます。C棟が文字通り中心となり、世界最高水準のトータル・ヘルスケアの提供を体現できる病院として、更なる発展を遂げるべきが来たと確信しています。



前病院長

内田 信一

Shinichi Uchida

2021年10月1日に病院が一体化された際に、初代の病院長を務めさせていただきました。一体化に至るまでは、その準備に職員の皆様の多大なる作業がありました。一体化され間もなく3年が経ちますが、私には今の形があるべき姿として、とても自然に感じられます。一体化されたことで医と歯の相互理解が進み、病院の理念である「世界最高水準のトータル・ヘルスケア」をより良い形でご提供できる体制に近づいたと感じております。また、医と歯の連携により、診療のみならず研究や教育面でも深化が進んでいると考えます。そういった中、2024年10月に本学は東京工業大学との統合を控えています。やはり、人と人の互いが見える形での交流が増えることが、新たな可能性を生む原動力であることを、この医歯一体化で強く感じることができました。よって、今後、一体化された病院にさらに理工学が融合することによって、新たなイノベーションの創出を大いに期待しています。患者さんには、2025年1月に各々の病院のシステムの統合がなされるまでは、お手続き等でご不便をおかけしておりますが、医病にかかっている患者さんには歯に関する相談事について、歯病にかかっている患者さんは歯以外の全身的な心配事がありましたら、どうぞご遠慮なく担当医に一言お伝えいただければ、医と歯の垣根なく、東京医科歯科大学病院、大学統合後は東京科学大学病院として、「世界最高水準のトータル・ヘルスケア」を提供させていただきます。



前首席副病院長

水口 俊介

Shunsuke Minakuchi

2021年10月1日に、東京医科歯科大学病院は誕生しました。その数年前より医病と歯病の統合については議論されておりましたが、当時は反対意見が多くありました。私も反対派で「日本の歯科医療のフラグシップである歯学部附属病院がなくなるということは、診療だけでなく、歯学教育、歯学研究も凋落してしまうのではないかと考えておりました。しかし、一体化を挟んで2年間の病院長の期間と、その後定年退職するまでの2年間を病院内で過ごし、それが全く杞憂であったことを認識いたしました。一体化の1年半前に発生した新型コロナウイルスパンデミックにおいては、正体のわからない致死率の高いウイルスを相手に、医病と歯病が協力して立ち向かいました。各々指揮系統や情報伝達が微妙に違うところをすり合わせて対応しなければならず、当時は毎朝早朝に病院執行部の会議を実施していました。おかげで両病院は協力して難局を乗り越え、その経験は一体化に活かされたと考えています。一体化の産物は色々ありますが、医療安全、感染対策が一元化され、的確に実施されるようになったこと。もちろん歯科治療は医科と同じではないので考慮は必要ですが、基盤は同じとなり確度は高まりました。そして医と歯が連携したオーラルヘルスセンターの設立。まさに医歯連携の理想的な形が本院の中に完成されつつあるのだと実感しています。次は医歯工連携です。それぞれが理解し合い人々の健康と幸せに貢献していただくことを期待しています。

挑戦、交流、変革、救急医療・集中治療を表すC棟誕生 平時も非常時も世界最高水準の医療を提供

2023年10月1日、東京医科歯科大学病院の新しい施設として、C棟（機能強化棟）がオープンしました。地下2階、地上7階建てで、延べ床面積は約15,000㎡のC棟にはERセンター、手術室、ICU-HCU、材料部、医療情報部などが集まり、病院の機能を強化しています。また医科A棟と歯科D棟を結ぶことで、医科と歯科を融合させた他に類を見ない急性期医療をより迅速に提供することを可能にしました。さらに御茶ノ水駅に最も近い棟として、大都市圏の医療体制を守るために、地震発生時でも病院機能を継続できるように強力な免震装置と、非常用医療機器・発電機が施されており、“災害に強い大都市の病院”としての機能を備えています。

C棟の建設計画は2016（平成28）年頃、当時学長だった吉澤靖之先生と、

医療担当理事を務めていた田中雄二郎学長が中心となりスタートしました。C棟は病院の再整備の一環で計画され、災害時の拠点となること、本学の新たな顔・玄関となることを原則に、検討会を作って建設計画が進められました。着工は2020年7月1日で、新型コロナウイルス感染症パンデミックの影響などもありましたが、約3年の歳月をかけて完成し、2023年9月18日には、「東京医科歯科大学病院C棟完成披露式典」が開催されました。

免震装置、非常用発電機を設置

各階の多彩な機能をご紹介しますと、地下2階とその下には、地震発生時に揺れを吸収し、揺れを建物に伝わらないようにしてダメージを少なくする免震装置が設置されています。さらに非

常用発電機800キロワットが2台、重油タンク5万リットルを設置しており、約96時間（4日間）の停電でも材料部を含め医療行為を継続できるように防災機能を強化しています。

地下1階のERセンターには、手術室・処置室・重症処置室などが全10室あり、中でも「ハイブリッドER」は救急初期初療、緊急CT、緊急血管造影、緊急手術の4つの機能を1つの部屋で包括でき、救急患者さんの移動を最小限にすることで、安全で迅速な対応を可能にしています。

1階のカフェ・ホールは地下から地上2階まで吹き抜けの広々と心地よい空間で、大手コーヒーチェーン店、大学関連グッズなどを販売するショップ、カフェ、ギャラリー、自由に利用できるソファ、テーブル、イスが設置されていま

す。壁面には災害時に使用できる医療ガス供給設備や非常用コンセントが21カ所に設置されているほか、広々とした授乳室があります。

2階には医療情報部があり、高度で先進的な医療において欠かせない、電子カルテ、オーダーリング、検査結果、画像、各種文書といった多くの重要な診療情報を安全に取り扱えるように管理しています。情報通信技術（ICT）を最大限に活用したシステムの運用を遂行することで、最新で最善の医療をサポートしています。

完全個室のICU、ハイブリッド手術室

3階のER-ICU（救命救急集中治療室）、ER-HCU（救命救急高度集中治療室）には完全個室が30床あり、最新鋭の医療機器や十分に配慮された感染予防システムなどをフル活用することで、重症外傷、ECMOを用いた心肺蘇生、出血性疾患（消化管出血など）、虚血性疾患（心筋梗塞、塞栓性脳梗塞）に対して今まで以上に速やかな対応が可能です。

4階には材料部があり、院内で様々な医療行為に使用される再使用可能医療機器（ハサミやピンセット等）や医療材料（注射器や注射針、カテーテル等）を、安全かつ適切に使用できるように再生処理・調整・管理・供給する業務を行っています。

5階のICU-HCUは、完全個室で外光が差し込む25床を設置し、そのうち4室が陰圧・陽圧の切り替えが可能な感染対策室です（3階のER-ICUにも4室あり）。また一部の個室には収納式などのトイレを設置したほか、ICUとHCU間



5階 ICU



ハイブリッド手術室



非常用医療設備



1階 カフェ・ホール



4階 材料部

に可動式の遮断扉を設け、感染症発生時に分離して感染対応ができるように設計しています。

6階の手術部には、高度先進医療を支える7つの手術室があります。手術台と血管撮影装置（X線撮影装置）を組み合わせたハイブリッド手術室を2室新設したことで、より高度な循環器系疾患の手術や、カテーテル治療と外科手術を組み合わせた大動脈ステント治療などが可能になりました。また最新型ダビンチも導入し、世界のロボット手術を牽引していきます。

7階は機械室と屋上があり、屋上には環境に配慮した設備が2つあります。1つはソーラーパネルが設置されており、太陽光発電をしています。もう1つはグリーンスペースを設けて芝生を育てています。

C棟は救急医療・集中治療、交流、変革、挑戦などの英語の頭文字にあるCを冠しています。自由でフラットに集える東京医科歯科大学のモニュメントとして愛されながら、平時にも非常時にも変わることなく世界最高水準のトータル・ヘルスケアを提供することで人々の幸せに貢献し続けてまいります。



C棟完成披露式典

C棟外観